

# 成人ADHDに対する神経心理検査を用いた認知リハビリテーション

## Cognitive rehabilitation for adult ADHD using neuropsychological assessment

中島明日佳<sup>1)</sup>, 船山 道隆<sup>2)</sup>, 中村 智之<sup>1)</sup>, 稲葉 貴恵<sup>1)</sup>

**Key Words** : 成人ADHD (adult ADHD), 神経心理検査 (neuropsychological assessment), facilitator, self-help cognitive therapy

### はじめに

成人ADHDの治療とセラピーに関しては、薬物療法と併用して心理社会的介入を加えることが推奨される。治療の過程ではその病態とメカニズムを本人が受け入れることが求められるが、その病態となる神経心理学的な指標はあまり明確ではない。今回われわれは成人ADHD例に対し、詳細な神経心理検査の結果に基づいて治療の病態とメカニズムの理解を本人に促す個別形式の認知リハビリテーションを実施した。

### 1. 方 法

神経心理検査結果をもとにセラピストとの対話の中で問題点に気づき般化していくことを目的とし、以下の方法で実施した。

①神経心理検査を実施。Aできない項目があることを知る、B低下した項目の特徴をSTがフィードバック、C STが具体例を呈示することで自己の症状に気づく、D自己観察を促す。

②本人の自己観察→神経心理所見をもとにSTが自己観察のフィードバックと対策を検討。

③症状が出現する状況の傾向や事柄を把握することで患者が一人で問題点を改善。神経心理検査には知的機能としてWAIS-III、ワーキングメモリーは、WMS-Rの論理的記憶、Rey複雑図形、ダブルタスクとしてCATのPASATを用いた。また、自己評価としてWHO QOL26 (1低い→5高い)、Global As-

essment of Functioning (GAF) (1重度→100症状なし)、うつ病評価としてMADRS-J (0問題なし→60重度うつ状態)を実施し、介入前後の結果を比較した。

### 2. 具体的な介入例

[症例1] 36歳 女性 看護師。

当院にてADHDと診断され、薬物治療とSTによる認知リハビリテーションを開始した。神経心理検査の結果、症例はダブルタスクの成績の低下を認めたため、STが「作業するために一時的に覚えておく記憶が複数になると忘れることがあるかもしれません」と具体的に説明し、自己観察を促した。すると症例は「患者さんの急な検査や処置をよく忘れる」という傾向を見出すことができた。また、STが神経心理所見をもとに症例の自己観察をフィードバックし、ともに対策を検討した結果、最終的には指示内容をメモに書く前に復唱して確認するなど、対策を考えるようになり、さらに自分に合う仕事内容について検討するようになった。自己評価においてもWHO QOL26は身体領域および心理領域ともに介入前は2.7点、介入後の身体領域3点、心理領域2.8点、GAFは介入前65点、介入後75点、MADRS-Jは介入前15点、介入後5点と改善を認めた。

[症例2] 52歳 男性 技術職。

前医にて薬物療法を開始しており、当院でも薬物療法の継続に加え、STによる認知リハビリテ-

1) 足利赤十字病院リハビリテーション科 Asuka Nakajima, Tomoyuki Nakamura, Yoshie Inaba : Department of Rehabilitation, Ashikaga Red Cross Hospital

2) 足利赤十字病院精神・神経科 Michitaka Funayama : Department of Neuropsychiatry, Ashikaga Red Cross Hospital

ションを開始した。神経心理検査は健常群と同等の結果であったが、WAIS-Ⅲ FIQに比べPASATが低下していたため、ダブルタスクの成績が低下していると判断した。STが症例に対して具体的に説明を行うと、次の来院時には、自己観察した事柄を紙いっばいに書き留めてきた。紙に書かれた内容に対して検査結果をもとにフィードバックし対策を話し合った結果、自己解決の方法を考え、職場を退職し新たな技術職を探すようになった。WHO QOL26は介入前の身体領域3.3点、心理領域2.7点、介入後の身体領域3.6点、心理領域3.2点、GAFは介入前75点、介入後80点、MADRS-Jは介入前11点、介入後7点と改善を認めた。

### 3. 考 察

神経心理検査の結果に基づき認知リハビリテーションを実施した結果、症状を理解し、症状に対して納得・受容することが可能となり、自分に合った仕事やライフスタイルを検討することにつながった可能性が高い。この方法は成人ADHDに対する他のさまざまな精神療法と比較すると、症例にある程度の知的能力があり、さらに治療者に時間的余裕がある場合に限られると考えられる。